2021 年度 第１回豊岡市地方創生戦略会議 会議録（要旨）

○開催日時　　2021 年７月 20 日（火）午後２時 00 分～午後４時 00 分
○開催場所　　豊岡市役所本庁舎 庁議室
○出席委員　　関貫座長、中嶋副座長、嶋委員、岡本委員、太田委員、永田委員、西垣委員、宮崎委員、木村委員、古橋委員、森委員
○欠席委員　　平田委員、太田垣委員、朝倉委員、佐伯委員、高宮委員、橋本委員
○傍 聴 者　　25 名

１　開会

２　関貫座長（市長）あいさつ

この会議には、私は初めての参加ということになります。皆さんのお力を拝借しながら前へ進めていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

これまでの内容を拝見しましたところ、やはり問題・課題が人口減少であるということは間違いないと感じています。６月 25 日に 2020（令和２）年国勢調査の速報値が出ました。豊岡市におきましては、77,519 人という結果が出まして、前回の調査と比較すると 4,731 人の減という状況になっています。これは比較しても仕方ないのですが、旧竹野町相当分の人口が減ったということです。もちろん、この減少自体は豊岡市だけではなく全国的な減少として続いているということが言えますが、減少が続いているとともに、今はコロナ禍で若干ニュアンスが変わってきていますが、東京圏への一極集中の結果であるというふうには感じています。

人口減少を本当に緩和していく、ストップしていくということを適正に、しっかりと行っていかなければならないと強く感じています。地方の人口減少が進んでいる中ですが、一方、一年以上続いている今のコロナ禍の中で、地方への回帰現象というのも一部では起こっていると報道にあります。その機運が高まっているかどうかということを考えると、ほんの一部の方にそういう意識が動いているというふうには感じますが、多くの方がその方向に動いているというのは、まだ私自身は感じるところではありません。それが継続していくための方策を持ってそういった機運を盛り上げていくことができるならば、それをやっていくというのも一つの方法でしょうが、コロナ禍が終わったという状況を考えると、また普段通りの生活に戻っていくわけですが、その普段通りというのが旧来からの普段通りなのか、新しいスタイルでの普段通りなのかという選択が、そこには生まれてくるかと思います。

国の制度等を利用する地域おこし協力隊というのがあります。コロナ禍の中でも協力隊として来ていただく方が大変多くの数となっているというのは、豊岡の一つの誇りであると思っています。全国津々浦々、希望してそういう制度を利用されている方はいらっしゃいますが、その中でも豊岡には現在 39 名、そしてその 39 名が決まる前には応募者数が 50 名以上あったと聞いていますので、豊岡もそういった面ではよく頑張ってやっている、そして今後も続けていかなければならないと強く感じています。

今年４月１日には専門職大学が開校しました。皆さんもご存じのように、現在 84 名の学生の方が学び舎で頑張っていらっしゃいます。その学生たちも４月からですので３か月くらいには

なるわけですが、もう今の段階でもこの地に溶け込むというような行動をされていて、地域の皆さんもその姿を見て大変喜んでいらっしゃるということを感じます。今後大学に通ってくる学生は毎年 80 人ずつ増えて４年後には 320 人となるわけですが、そういった若い方の力・躍動を地域にどしどしと与えていただき、地域の方もうまく交流を深めていただいて、まちづくりに結べたらと思っています。

次は、今課題となっています「深さをもった演劇のまちづくり」です。もちろんこれは継続されて今に至っているということが間違いなくあり、大変いい結果をもたらしているということは感じつつも、市民の方々からはそうではない意見もたくさん私自身得ています。市政の基軸がそういった活動になってしまっていて、その他はちょっと一歩、二歩下がったような状況で市政が進んでいるという感が生まれてきたのかなと感じます。私も決して演劇自体を否定するものではないということは言っていますし、演劇をにぎわいの一つの要因にしていただくということは大変良いことだと思っています。言葉で表現するなら「演劇もあるまち」、そして他にも諸々の良いところがあるまちにする。その諸々のというところですが、色々な面で定義することができるかと思います。

基軸として動く市政・施策のほうは、その諸々の全てが市民感覚を共有できる内容としてやっていきたいと思っています。そういった意味でも、行政の演劇への関わり方が今までとは変わる可能性は十分ありますし、私は変えなければいけないと思っています。それが全ての項目的にレベルになった状況を作っていって、まちの活力、元気さを取り戻し、市民の方に共感を得ていただく市政を行っていきたいと考えます。

第２期地方創生総合戦略の基本的な枠組みは変える必要はないと思っています。そのため、今言いましたように「深さをもった演劇のまちづくり」についても、その意味合いで記載して第２期地方創生総合戦略において変更等をあえてする必要はないと思いますが、その他の内容に合わせて変えるべきと判断した場合は、変えるということで構わないと思っています。

以上、ここに座らせていただく私の考え方を述べさせていただきました。今後は、これまでやってきていただいたことを基にして、また新たなアプローチや戦略を付け加えるために行動に移していただくことがあるかもしれません。委員の皆さんそれぞれのご意見を活発に出していただければと思っています。

３　報告事項

(1) 2020 年国勢調査速報値からの人口分析

副座長　　冒頭の座長の発言にもありましたように、国勢調査の速報値が出てきましたので、これに関連した直近の豊岡市の人口動態について、それから、今回はプラスアルファでコロナの影響についてもご説明させていただきたいと思います。

まず、77,519 人ということで、2015 年の国勢調査から５年間で 4,700 人ほど減少したということですが、これだけの数字を与えられても、どういうふうに解釈すればいいのかというところがあるかと思います。豊岡市の総人口は、ほぼ基準推計にそって推移していると書かせていただきました。豊岡市が独自に作成しています長期の人口推計がありまして、過去のトレンドから見て、何も対策をしなければ 2020 年、30 年、40 年と将来に向かってベースラインに沿った形で人口は

減っていきます。大体 77,500 人ということで、想定通りということです。

ちょっと見方を変えれば、第１期の創生戦略が終わって今は第２期に入っているが、この５年間の創生戦略の結果はどうしたんだ、５年も無駄にしたのかとおっしゃるかもしれませんが、人口のテーマというのはビジネスや経済の分野とは違いますので、対策をやったからといってＶ字回復ということにはならないわけです。50 年、100 年かけて人口がどんどん減っていくというトレンドは、少なく見積もっても 20 年から 30 年くらいの取組みの中でじわっと回復期にもっていかざるを得ないということになります。第２期に入ったと言っても、まだまだまちの基礎体力作りのような段階にいると理解していただいていいかと思います。具体的に減り方が少しスローダウンしてきたなというような数字を実感していただけるのは、うまくいっていればですが、おそらく 2030 年から 40 年くらいのことという見通しでいていただければと思います。

改めてですが、人口減少対策は長期戦であるということと、まちを挙げての総力戦であるということを申し上げておきたいと思います。

２点目のコロナの影響ですが、出生と死亡を差し引きする自然増減は、出生の値はほぼ例年・昨年通りで、死亡数がちょっと増えたかなといったところで、自然減はちょっと悪化したという状態です。

出生数は 2020 年のデータを最新のものとして手元に持っていますが、2020 年生まれの子というのは、コロナの影響を受けていません。本当の影響がもし出てくるとすれば、豊岡市も今は年間 600 人ほど子どもが産まれていますが、2021 年以降に「今はこういう時期だからやめておこうか」という産み控えが大きなトレンドとなるのであれば、50 人や 100 人減るということがあるかもしれません。

2021 年１月から４月までの統計では、全国平均では大体８％くらい、兵庫県で大体７％くらい減っています。豊岡市で 600 人の７～８％ということは、50 人くらいは減ってもおかしくないかなということです。それはいいのですが、産み控えということは、理論的にはそれを取り戻す時期があってしかるべきなのですが、心配なのは、なんとなくこのままずるずると減った状態が当たり前になってしまって、600 人くらい産まれていたのがストンと 500 人くらいに落ちたまま将来もいってしまうと、人口減少が加速する要因になってしまうということで、ここから２、３年は注意が必要かなと思っています。

転入者と転出者の差し引きの社会増減ですが、日本人と外国人に分けて数字を分析しています。日本人については、日本全体がコロナ禍で景気が悪いと、大体こういうときは田舎の社会的な増減の数値は改善します。要するに大都市や大企業での採用熱が冷めるので「地元に帰るか」とか「こういう時期だから神戸や東京に行くのはやめようか」ということになってきて、まちからの若者の流出が少しスローダウンするということが起こります。ただ、豊岡市の場合は、若者の転出・転入の動きプラス外国人の技能実習生たちの出入りが相当な規模を占めています。このコロナ禍で新しく入ってくる外国人の方がほぼなくなったのに対し、任期が終わって帰る方は帰ってしまうので、外国人の方の社会増減に関しては悪

化しているということになっています。

スライドの４枚目は1920年からの豊岡市の人口増減率を示しています。５年ごとの平均値ですが、今我々が直面している豊岡市の人口減少というのは90年代以降から始まっているということが見て取れます。1990 年から 95 年はマイナス0.06%、2010 から 15 年はマイナス 0.79%なので、大体この期間に毎年 0.8%ずつぐらい豊岡市の人口が減っていて、今もこの流れに沿った形で推移してきているということです。

これはどういうことかというと、過去のトレンドのままこれからずっと豊岡市の人口減少が続いていくと、0.8%ですから約１%ずつ豊岡市の人口が減っていくというのがトレンドですよと言っているわけではなくて、実はちょっとずつ加速しているということです。加速していくというのを我々は過去のトレンドのままと言っていますよということで、本当に人口減少が顕著になってきたなというところから、あっという間に減っていくようなことがこれから起こってくる。同じペースではないということです。

周辺自治体との比較ですが、５年前は82,000人いたのが今は77,000人になって、大体4,700人の減少です。この５年間に毎年1.18%ずつ減っているというのが他の自治体と比べてどうかというと、但馬と京都北部の３自治体の中では、豊岡市は比較的減少の進み方がスローなほうではあるということです。明らかに兵庫県北部の中核都市である豊岡市と京都府北部の中核都市である福知山市は、自分のまちの人口も減っているのですが、同時に周辺の自治体から若い人たちを吸収しているので、この二つの自治体の人口減少は多少緩やかではあります。ただ、但馬地域であれ山陰地域であれ、全域的な人口減少に向かっているということについて変わりはないということです。

それからコロナの影響についてですが、考慮する数字は、出生と死亡と転入と転出の４つしかありません。この４つの数字がどちら向きに動いてどう影響しているのかということが、人口減少が進むのか進まないのかということを左右しますし、コロナの影響がどうなのかということに関しましても、この４つの数字に対してコロナがそれぞれどういう影響を与えるのかということから分析されるわけです。

出生については昨年とほぼ変わっていません。2019年が507人で2020年が509人なので、ほぼ同じ数字で推移しました。ただ、2021年以降減ってくるかもしれませんので要注意ということです。

死亡については、2019年に1,113人だったものが2020年には1,151人ということで、40人くらい死亡数が増えたのですが、それほど大きくコロナの影響で次々と亡くなられたということではないと思います。多少はコロナが原因でという方もいらっしゃるかもしれないし、コロナ禍における生活の中で体調を崩されてそのまま亡くなられた方もいらっしゃるかもしれませんが、それほど大きな変化ではありませんので、出生・死亡のところについては、多少人口減少を加速させる要因だったかもしれませんが、それほど気にしていただくことはないと思います。

注目すべきところは転入・転出のほうであって、日本人の移動については先ほども申しました通り、不景気のときには少し改善し、外国人の移動に関しては、特に今回はコロナで国際間の移動がほぼシャットアウトされる状態になりましたので、新しい方が来られなくなったことがマイナスに影響するということです。

視覚的に確認していただくと、やはりそういう傾向があるんだろうなということが観察していただけると思います。全国的に有効求人倍率がどのように推移しているか、2000 年から 2020 年までの 20 年間を示したグラフと、一方は、豊岡市の社会増減を示したグラフで、500、600、700 人くらいの転出超過を常に示しています。有効求人倍率の数字を見ていただくと、0.4 や 0.6 といった時期もありますが、大体 1.0 から 1.2 あたりの有効求人倍率がある。有効求人倍率が上がるとき、景気が良くなって大都市・大企業における採用活動が盛り上がるときに、豊岡市の社会増減が下がるんですね。逆に、世の中が不景気になって有効求人倍率が下がると、豊岡市の社会増減は改善するという、シーソーのようなパターンを示しているということです。近年で言いますと、2009 年から 2011 年あたりですね。リーマンショックで不景気になって、そのまま 2011 年の東日本大震災がありましたが、そのときに有効求人倍率がガクっと下がって、豊岡の社会増減が改善した時がありました。それから、最近では 2019 年から 2020 年のところを見ていただくと、有効求人倍率がガクっと下がっている。そうすると、豊岡市からの流出が改善するということが起きているということです。

私から注意喚起させていただきたいのは、豊岡市くらいの人口規模・経済規模のまちですと、まちの外で起こっている外部要因の影響を強く受けますので、若者の流出が改善している時にあまりそのことに一喜一憂し過ぎないでいただきたいんです。今はコロナ禍で改善してきているわけですが、そのことをもって地方創生戦略は大成功だと喜び過ぎていると、コロナが収束するとストンとまた落ちるわけですね。長い目で、まちの体力自身で若者の流出が改善されてきているかどうかを見ていただきたいと思っています。

豊岡市の若者の流出状況を日本人の動きと外国人の動きとで分けてお示ししているのがこちらの図（スライド７）になります。下のブルーの線が、差し引きしたときに日本人の若者が毎年どれくらい流出しているのかを示しています。例えば、最近の 2017 年から 19 年ですと、300 人から 500 人くらい外に流出していたというのが日本人の状況でした。一方で、黄色の線は外国人の方、それも特に技能実習生として入ってくる方を中心とした数字なのですが、ここ数年 200 人とか 156 人とかいう数字が出ていますが、差し引きした結果、豊岡市に来た方は純増していたわけですね。日本人の数字と外国人の数字を合わせたものが赤の線ですが、大体 600 人くらい日本人の若者が流出していて、150 人くらい外国人がプラスになっているということで、差し引きすると 450 人くらいの若者が流出しているという構図になっています。

そこで、コロナの影響が 2020 年度にどう出たかということですが、先ほど説明したように日本全体の不景気感で豊岡の若者が外に流出しなかった、Ｕ・Ｉ・Ｊ

ターンする方が増えた結果、日本人の流出は少し緩和していると。一方、外国人のプラスが減ったことでマイナス 360 人くらいになっているということです。

この図から見ていただきたいのは、豊岡市の若者の流出を特に注視しているわけですが、外部要因プラス実は外国人の若い方の動きというのが規模として相当重要になっていますので、トータルだけを見て良くなっているな、悪くなっているなと判断してしまうと、実はそれは外国人の方のほうの動きかもしれないのです。そうすると、この戦略会議がやっていることの多くは外国人を直接のターゲットとしていないものが多いですので、そこで勘違いを起こさないようにしていただきたいと思います。日本人の動きのほうで確実に改善がみられていないといけないということです。もしくは、戦略会議でもう少し外国人をターゲットとするような施策が入ってきて、その結果プラスに動いていればそれはそれでいいわけです。

スライドはこれで最後ですが、専門職大学が開学したことに関しては、2021 年４月に開学しているわけですので、今後４年間で 320 人の学生数になってくるということですが、先ほどの日本人の社会増減の動きのところに、学生の動きが毎年 80 人ずつ足され上がっていくわけですね。上がるんですが、それは３年間か４年間の動きに過ぎなくて、４年経つと今度は卒業生が出始めますね。卒業生が出始めると今度は 80 人入ってきて 80 人卒業していくわけですからプラスマイナス０になります。ですので、開学したことが人口動態的にこのまちに良い効果をもたらすためには、ある程度まちへの定着が欲しいなということなんです。80 人が来て 80 人が豊岡にということはないと思いますが、その中で 10 人でも 20 人でもこのまちに住み続けて活躍したいという方が出てくること、それから、出てしまって定住人口としてはこのまちでカウントされていないけれども、このまちで行われている観光や鞄づくりや演劇といったものに関係を続けてくれている、関係人口としてまちに活力を維持し続けてくれる若いファンのような層が増えているようであれば、それも人口動態的には良いことかなと思います。

ということで、開学して 80 人や 320 人若い方が増えることは良いことだけれども、人口動態的な効果を狙うためには、ここから２、３年が勝負ということで、ぜひまちを挙げて関係性づくりを積極的にやっていただきたいなと思っているところです。

Ａ委員　グラフの中で気になるところがありました。増減のところで、2017 年から 2018 年に通常の増減の具合に比べて大きく動きがありますが、これはどういう要因があるのか教えていただけますでしょうか。世の中に何かあったのか、豊岡市に何かあったのか、今後もそういった要因によってこのような増減がある可能性があるのか。

副座長　社会増減、若者の転出・転入の部分については、おそらくこのときに景気が良かったということかと思います。ただ単に景気が良い悪いだけではなくて、大企業が採用活動でどういったトレンドを持っているのかということに影響されることがあります。有効求人倍率を説明しましたが、大企業で去年うまく採用できな

かった、希望する人数の採用ができていなかったなどの積み残しがあって、この2017 年から 19 年あたりで加熱して有効求人倍率が跳ね上がっていたんですね。採用できていない企業がどんどん採用を増やしていったことで、学生のほうもどんどん内定をもらって流出が顕著になると、そういうことがあるかと思います。

自然増減のほうは、私も明確に理由が申し上げられないです。豊岡市くらいの人口規模になりますと、偶然性に相当影響されるところがありまして、これが例えば神戸市のように 150 万人のまちですと、毎年１万人くらいの子どもが産まれます。これくらいの規模があればそんなに大きく上がったり下がったりしないんです。大体減り続けるにしてもなだらかなトレンドで少しずつ落ちていくものなのですが、豊岡市くらい、もしくはもっと小さい１万人や２万人くらいのまちになりますと、「なんかその年はすごく産まれた」というようなことが偶然起こったりしますので、１年急に下がったなと見ていただくよりは、３年とか５年くらいの期間で見ていただいて、大体平均をとってみたら 50 人ずつくらい減っているな、これは危険だなというような見方をしていただければと思います。

(2) 2020 年度地方創生事業の実績

事務局から資料１～資料４に基づき説明。

(3) 移住・定住促進策等の現状

事務局から資料５に基づき説明。

(4) すべての人が、生きやすく、生きがいのあるまちへ～ジェンダーギャップの解消～

事務局から資料６に基づき説明。

(5) 深さをもった演劇のまちづくり

事務局から資料７に基づき説明。

４　意見交換

座長　　質問・意見等がございましたら挙手して申出でいただければと思いますが、いかがですか。

副座長　　私から二点。一つ目は移住・定住の話ですが、仲介サービスを使うことによって、相談件数や実績値が増えてきているというのは、良いトレンドとして見ていいのかなと思っています。一時期ランキングで豊岡市が１位になったりしたのは、どのあたりが注目・評価されたためと考えるのか。関連して、いまさらの確認なのですが、移住者というのは何を入れていて何を除外しているのかということです。Ｕ・Ｉ・Ｊターンとありますが、Ｕを除いてＩとＪをカウントしていると理解していいのか。Ｊターンというのは要するにもともとは近隣市町出身だった人が大学は外に出ていて、帰ってくるときに出身の市町にはあまり仕事がなかったから豊岡にという場合ですが、これを移住者としてカウントしているのかどうか

といったあたりですね。もともと知っていた但馬の地域だから、移住の相談はせずに自分で帰ってきたというような場合はカウントしていないのかもしれませんが、どのあたりがカウントされているのかということです。それから、質の問題といいますか中身の問題として、相談して入ってきている若い方が倍増しているという状況ですが、そういう人たちは「こういうことがやりたくて豊岡に来た」とか何をおっしゃっていたのか、何をやりたくて豊岡に来ているのか、そのあたりのトレンドや感触をお持ちでしたら伺いたいです。

二つ目は演劇に関して最後のほうでおっしゃっていたことですが、こういう演劇に関する取組みをやりながら地方創生を進めていくということが、理屈として成り立っているんだから頑張っていけばいろいろと良いことが起こるだろうという、ちょっとふわっとした形になっていると。これは私もアドバイスする立場にあるので反省も含めて申し上げますが、芸術的な効果とかコミュニケーション教育に関する効果とか、それからまちのブランド力が上がっているという効果とか、私の専門に近い話で言うと、演劇の取組みを様々に進めていくことによって、具体的に数値的にはどういう形で人の流れに対してインパクトがあったのかということです。時々平田オリザさんが今回は何千人来てそのうち何千人は東京からですという数値を言ってくださいますが、このあたりのハードな数値というのはもう少し密に把握すべきだと思います。それから、経済とか雇用に対するインパクト。これくらいの経済価値を全体として生み出しているとか波及効果で雇用を生み出しているとか、理屈では皆さん分かっていらっしゃると思うんですが、具体的にどれくらい効果があって増えているのか、良いことが起きているのかというのは把握すべきですし、把握した上でそこを強化していくということを意識的にやるべきではないかと思います。最後は地域へのインパクトということで、このあたりは行政の関わり方が難しい部分があって、あまりやり過ぎると引かれてしまうし、かといって放置しておいてうまくいくとは限らないし、そのあたりの匙加減はあると思いますが、帰ってこられた方が単に教育活動や芸術活動をやるだけではなくて、実際に地域に住まれて地域住民の方と交流もされて、その中でコミュニティが盛り上がっている。盛り上がる中でいろいろなことが実現できているということを把握しつつ、応援できる部分があれば当然応援もする。このあたりのきちんと把握されて報告されているということ、そして、フィードバックするような形で強化すべきところは強化する、このあたりをしっかりやっていただきたいなと思っています。

事務局　まず移住・定住ですが、発信としては関心のある層に向けて関心を持ってもらえるようなコンテンツを発信し続けて、それに反応していただいたということがあると思います。どこが評価されたのかという点については、実際にお越しいただいた方にお聞きすると、他のまちに比べて豊岡はおもしろそうだとか、『小さな世界都市』というまちのパーパス（目的）みたいなものがはっきりと示されていて、その中でも演劇やコウノトリ、それから環境の取組みと、様々な取組みが行われているというところで、このまちなら自分のやりたいことが実現できるので

はという期待感というものを伸ばしてくれたというようなことを聞いています。まちの取組み全体が評価されているのかなと思っているところです。

移住者のカウントにつきましては、住所が豊岡市以外から入ってこられた方は全て移住という形で取り扱っていますので、ＵもＩもＪも含む形になっています。

ランキングについては、最初に申しあげた通り、様々なメニューがあってその先におもしろそうなまちがあるということで、とにかく豊岡をクリックする人が増えたということですね。それが積み重なって一番になったということなので、発信する側の情報と求められている情報がうまくマッチしたのかなと、これは引き続きやっていきたいと思っているところです。

事務局　「深さをもった演劇のまちづくり」への質問で、地域の経済や雇用への具体的な効果というのがありました。現状、「深さをもった演劇のまちづくり」という取組みでは集計はしていないのですが、演劇祭につきましては、消費額や経済波及効果を計算しておりまして、それは公にお示しをしています。ただ、雇用についてはそこまではできていません。

副座長　多少自虐的に申し上げますが、そんなに豊岡は昔から全国的に注目されるまちといいますか、移住したいと常にランキングの中に入ってくるようなまちではなかったと思うんですね。それがポンと上がってくるということは、何かきっかけや起爆剤があるのではないか。それは一つはこういうツールを使うようになったということはあるかもしれませんが、ツールを使うという意味では他の自治体も同じ条件なので、このあたりの豊岡市自身が狙っている起爆剤がきちんと機能して注目度が上がっている、反響が出てきているということなのかどうかを確認してほしいのですが、いかがですか。

事務局　やはり来られた方に実情を聞くというのが一番正確なのだろうと思いますので、まだまだ聞き取りできていないところはあるのですが、なぜ豊岡に来たのかということをこれからしっかりと把握させていただいて、次につなげていくということかなと思います。知られなければ存在しないことと同じだとずっと言われてきていて、知ってもらうための工夫をしてきたということと、豊岡市自身の発信力が、演劇のことも含めてですが、ここ数年すごく上がってきているんだろうと感じています。

座長　今ランキングのことがありましたが、１位だということは見れば分かるんですが、この１位と集計された元ですね。これは「いいね」というクリックで集計された結果ということですか。

事務局　はい。興味があればまずはボタンを押して、それから先はやり取りが発生するということなので、まず興味があるというボタンを押された数が一番多かったということになります。

Ａ委員　移住者の方がどんどん増えているということなんですが、その後の定住確認というのはされているのかどうか伺いたいです。移住していただいたにも関わらず３年以内とか短期の間に結局出ていってしまった方がいるのかどうか。あと、移住後、定住につなげるように来られた方のフォローアップをされたり、地元住民

との交流の促進などに何か関わっていらっしゃったりするのか、そのあたりを伺いたいです。

事務局　移住されてきた方がその後転出されていないかということですが、転出されている方も中にはあります。特に補助金を使って改修されて入居されていたような方は、５年以内だと補助金を返していただく必要があります。それと、地域おこし協力隊の方は３年間任期があって、そのあと続けていていただくかということがテーマになると思いますが、３年間の任期を満了された方については、ほぼ100%残っていただいているという現状です。やはり合わないということで、１年や２年で解職という形で帰られる方はいますが、満了された方は引き続き豊岡に残っていただく確率が非常に高いと思っています。

座長　移住してきていただいた方へのフォローアップに関してはどうですか。

事務局　特に街中に近いところにいらっしゃる方については、先ほどスライドでもお見せしましたが、仲間と一緒にというコミュニティが出来上がっていて、その中でフォローアップがされてきているのかなというふうには感じています。一人ひとり追いかけてというところまではできていないところはあります。それと、各地域に入られている方については、それぞれの地域で受け入れていただくということでフォローアップする形になっています。

Ａ委員　今のお話を伺っていますと、お住まいになられた以降は、市からのフォローアップは特にされていないということでしょうか。各地域にお任せしている、もしくは来られた方本人の動きによるということでよろしいでしょうか。

事務局　一つあるとすれば、「暮らしのパーラー」というまちのサードプレイスというものを立ち上げて、そのあたりのフォローを民間を通じて行っていただくという仕組みも設けています。市だけではなくて、民の力も借りながらフォローアップしていくという、そういう体制になろうかと思います。

Ｂ委員　先ほどの説明の城崎国際アートセンターのところで、2020 年５月１日に文化観光推進法が施行されたとありましたが、具体的にこれが施行される以前と以後でアートセンターへの文化庁の支援や財政的なことなどの変化はあったのでしょうか。座長からは城崎国際センターへの支援の仕方を見直すというような発言も少しありましたが、こういった推進法の施行によって何か変化や影響があったのかどうかお聞かせいただければと思います。

事務局　豊岡市が豊岡市地域計画を策定するにあたりまして、中核の施設を指定する必要があります。今回は城崎国際アートセンターを文化観光拠点施設に位置付けました。５か年の計画に基づいて現在補助申請を行っていますが、市が取り組む「深さをもった演劇のまちづくり」の取組みに対して補助を頂けるということなので、城崎国際アートセンターに限ってということではないですが、市全体の演劇のまちづくりに対して文化庁からの補助が頂けるという仕組みになっています。

Ｂ委員　では以前と基本的にはそんなに変わらないということですかね。

座長　この件に関しましては今説明がありましたように、採択され５年間にわたって補助金がある程度頂けることになった。それによって城崎国際アートセンターの

立ち位置が変わるとか、そういうことはないということでご理解いただきたいと思います。

副座長　豊岡がこういうものを活用しながらとなると、今、芸術文化的な活動を通したまちづくりを行っていますが、今までよりウェイトを民のほうへ高めていくようなやり方に変えていきますよと言っているときに、逆に今度は行政もやっているからそっちの補助金もしっかり取りに行きますよというのは逆行しているように感じるのですが、このあたりのバランスというのはどのようにお考えですか。

事務局　計画自身は、豊岡市を含む演劇祭実行委員会や地元の交通事業者といった複数の団体で組織された協議会で策定しますが、補助の申請はそれぞれ個別の団体で行うことになりますので、必ずしも市が全て行うことはないです。

城崎国際アートセンターでの取組みについては市が補助申請をしますが、その他、民間でも「深さをもった演劇のまちづくり」の取組みをされているところはありますので、それはそれぞれの団体から補助申請を上げられて補助の採択を受けるという仕組みになっています。

副座長　はい。ありがとうございます。

Ｃ委員　先ほどの移住者の推移のデータですが、ここでは一般と地域おこし協力隊に分けて考えていらっしゃいましたが、来年は専門職大学の学生の数字も出てくるでしょうし、Ｕ・Ｉ・Ｊも含めてということでしたが、先ほども言われたように、これが但馬内なのか但馬外なのかということも、もう少し小分けにして出していただければ対策も見えてくるのではないかなと思います。あと、地域おこし協力隊として、なぜこれほど多くの方が来ているのかというのをもう少し明確に分かれば今後の対策につながるのではないかと思います。そして、定住率ですね。１年後、２年後、３年後というところを追っていただければと思います。ただ、そのときに就職というのも一つのキーワードになってきますので、就職先も追っていただければと思います。多分、公務員ですとか金融機関、IT 関係といったところが主流になってくるような気がしますが。

移住者のところで枠には入っていないですが、外国人ですね。これもかなり大きい数字のような気がします。１％ですが、100 人に１人と考えると今後大きい数字になってきそうな気がします。例えば、今来ていらっしゃる方ではベトナム人が一番多いですので、ベトナム人に対しての対応や市民に対してのベトナム語講座なども今後あってもいいのかなと思ったりしています。

あと二つだけ。移住に関することで、ＩＰＰＯが、募集すると相談窓口がすぐいっぱいになるというような状況ですので、地元の方に対しての窓口だとは思いますが、豊岡で開業したいとか事業をしたいという市外の方に対しても、そろそろ拡充を考えてもいいのかなと思います。

最後、ジェンダーの関係ですが、豊岡の事業所に就職された方がびっくりするようなことがあると思うんですね。クローズアップ現代でもお茶くみの問題がありましたが、ある事業所では男女のトイレ掃除を女性職員がずっとしているとＩターンの方がおっしゃっていたんですが、やはりかなりショッキングな出来事だ

ったと。改善しないのかというと、改善しにくい、自分で声を上げにくいということがありますので、これはどこかが音頭を取ってそういうところを把握して、改善しましょうというシグナルを送れるような対策が必要ではないかと。やはり個人だけに押し付けていたのではなかなか改善しづらいところがありますので、家庭においては皿洗いを男性がしましょうとか、そういったアクションを起こすことが必要ではないかと思います。それから、重く受け止めている方が多いですのでもっと軽やかに。ちょっと重いという声を聞いています。ちょっと軽やかな情報発信というのも考えていただければと思います。

事務局　移住者がどこから来られたのかの小分類、内訳のようなことは、これから整理をしてまた次の段階では出せるようにしたいと思います。それから、地域おこし協力隊がなぜこれだけたくさん来ていただけるのか、一つの要因として、すでにたくさんの方が豊岡に来ていますので、あそこに行けば仲間がすでにいるということが豊岡へ来やすくなっているのかなと思います。ある意味、好循環が起きているような気がしています。ＩＰＰＯについては、豊岡市で新たに業を立ち上げるという方に対して相談に乗っていますので、市外の方でも豊岡で業を起こそうという方は相談していただくことができる状態になっています。なので、地域おこし協力隊とか移住者の方でもＩＰＰＯに相談をされている方はすでにあります。確かに、日程を出すとすぐにいっぱいになってしまうという状況が続いていますので、拡充については検討していきたいと思っています。

事務局　ジェンダーの関係で、まず働く環境の整備ということでお話を頂きました。ジェンダーギャップのパンフレットの裏面に、豊岡市ワークイノベーション推進会議の紹介をさせていただいていますが、４月１日現在、市内の 54 事業所で、男性も女性も働きやすく働き甲斐のある職場へ厳格に取り組むということで構成をしていただいています。こういった企業を中心に、市内の事業所向けにワークイノベーションセミナーなどを行っていますので、意識啓発なども含めて推進をしていきたいと思っています。

また、家庭の中の役割分担というところでお話を頂きました。今回調査をしたものなのですが、実際に家庭の中で役割分担はどうあるべきかを家族で話し合っていただくきっかけになればと思っていますので、結果のほうも市の広報などいろいろな形で周知して、皆さんにご覧いただけるようにしていきたいと思っています。

あと、情報発信で重く受け止める方が多いという意見を頂きました。実際にテレビを見た方から、いい取組みだとおっしゃっていただく方もあれば、自分もすごく生きづらさを感じているとか、本当にいろいろな反応を頂いています。女性ばかりではなくて、男性も数名の方が、長男であることによって自分の選択肢の幅が狭まってつらい部分もあったというような話をされていましたので、いろいろな世代の方に十分話を聞くところからスタートして、また発信もしていきたいと思っているところです。

事務局　外国人住民の関係です。今の人数が増えているという現状を受けまして、多文

化共生推進プランを策定しようとしています。今年９月にはできる予定で、今、関係機関と調整をしながら進めています。地域や事業所と連携しながら、外国の方も住みやすくて、そして地域の一員になって地域に活力を与えられるようになっていけばということで、少しずつ進めていきたいと思っています。

座長　実習生の方というのは原則３年ないし５年というスパンでいらっしゃると思いますが、今はこの方たちも一時的な定住者という定義づけですかね。

事務局　技能実習生は３年から５年で帰ってしまわれますので、移住・定住とは別で考えています。

副座長　今 77,000 人のまちになってきて、外国人の方は大体 700 人、800 人くらい常にいらっしゃるので、先ほどおっしゃっていたように 100 人に１人くらいは外国人になってきているんですね。その内の 400 人くらいは若者で、そのほとんどが技能実習生ということです。ということは、新しくできた大学くらいの規模の若い外国人が大体いつもいてくれる状態なのですが、あとはこのまちがこのコミュニティをどうとらえるのかということなんです。まちとしてこの若さを活力とするのであれば、きちんと接点を持って、一緒に祭をやるとかですね、そういうところを意識的に育てるべきだと思います。

それから、確かに一時的な滞在ではあるのですが、法律も変わっていて、住民基本台帳にもきちんと登録する義務がありますので、我々が常に見ている統計には、この 400 人近くの外国人の若者の動きも含まれていることになります。そういう意味でも、常に存在を意識して、それから必要があればこれはやっぱり活用したいところだと私は思っています。

Ｄ委員　ジェンダーギャップのことで、最近感じたことと質問です。この間の日曜日に窓口に若い夫婦が来られて、オムツ交換できますかと聞かれたのでどうぞと言うと、お母さんがベンチに座られて登録の手続きを始められたんで「オムツ交換は？」と聞いたら、「夫がします」と言って、そのあとお母さんと廊下でしゃべっていたのですが、本当にご主人の手際が良くて、あっという間にオムツ交換が終わって帰っていかれたのが、すごく自然だなと思いました。その時に 10 年前のことを思い出しました。ある若い夫婦が豊岡に転勤されてきたのですが、そのお母さんが岡山で第一子を出産されたときに、里帰り出産をするものだとばかり思っていたら、おばあちゃんが「私が岡山に行くから」と言って岡山まで来られたそうです。里帰り出産をしたほうがそのおばあちゃんも家のことができて楽でしょうし、若い夫婦も安心して一か月過ごすことができたと思うので、そのお母さんはおばあちゃんになぜわざわざ岡山まで来たのか聞くと、「あなたが里帰り出産するのは全然構わないし、私もそのほうが楽だ。でも、そうしたら夫（娘婿）が岡山の家に一人でいて、あなたと子どもが一か月いない生活ができてしまう。夜泣きがあったり夜何回も授乳をしたり、そういう妻の姿を見ないまま一か月過ごしてしまう。その一か月が過ぎる頃には、あなたはこの子のベテランになっているが、一か月後に岡山の家に帰ったら、ベテランになったあなたと子どもの関係、そして夫はそれを見守る関係からスタートすることになってそれはよくないと思うので、私

が行き来する。夫には子どもが育っていく様子、一か月の大変な様子を感じてほしい。」というのがおばあちゃんの話だったんです。

私はその話を聞いたときに、ちょうどパパとママの夫婦の温度差というのが気になっていた時期だったので、この話はどの家でもできる話ではないと思うんですが、こういう考え方って大事だな、こういう考えの方がこれから増えるといいなと思ったことを、今回の窓口に来た夫婦のことで思い出しました。

これもやっぱり５、６年前ですが、クローズアップ現代で、女性と男性の脳の違いの実験を２週にわたってしたことがあったんです。その実験ではパパとママが向かい合ってランチをしていて、子どもが後ろで「ぎゃあ」と泣くと、ママは泣き声と同時にすぐに立って子どもの世話をしに行ったんですが、パパは最後までピクリともせずランチを食べ切ったんです。ママはその間に子どもを泣き止ませてよしよしとしていたんですが、パパはスパゲッティを全部食べ終わってからどうしたのと後ろを気にしたというのがありました。実は、これはパパが冷たいわけでも子育てに無関心なわけでもなくて、女性の脳というのは子どもの世話をする中でだんだんと子どもの声に敏感になるんだそうです。ところが、男性は世話をする時間も少なくあまり関わっていないので、なかなか敏感にならない。だから女性は夜中でも子どもの声でぱっと目が覚めるけど、男性はなかなか起きないと。そういうのをやったあとにその夫婦の後追いをしまして、そのパパに毎日４時間子どもの世話をしてもらうと、パパにも多少の変化が出てきて、子どものことに敏感になるというのがあったんですね。

いろいろと話しましたが、当たり前ということがどんどん私たちの生活の中に増えていったら、オムツ交換でも子どもの世話でも、できる者がするという当たり前が増えてくることで、ジェンダーギャップ解消の一つになるのではないかと思っています。この案を見たときに、いろいろな研修やワークショップを進めようとされていますが、今はどちらかというと介入しやすいグループや団体にジェンダーギャップ解消の働きかけが進んでいると思うんです。でも、実際に若い子たち、先ほどＣ委員も言われていましたが、学生や私が出会ったお父さんお母さんのような若い世代は、比較的「女だから、男だから」というのが少しずつ解消し始めていると思うのですが、それが良いとか悪いとかではなくて、ジェンダーギャップが当たり前になっている頑固な世代にもジェンダーギャップの研修やワークショップを進めていくことになったときに、その後の展開というか、そこから先はどうなっていくのかも大事なところかなと感じまして、そのあたりを教えていただけるとありがたいです。

事務局　よく言われるのが、赤ちゃんは産まれて一か月くらいが一番手のかかる時期で、母親の身体自体もまだ産後十分でない。本来であればそういう時期から夫婦で一緒に支え合っていくというのが大事だということで、今の戦略の中でも考えています。できれば家庭生活の基盤づくりといいますか、どのようにして自分たちが家事や育児を分担して家庭のことをやっていこうか、そういったことを考えていただくようなことも今後は検討していきたいと思っています。

おっしゃっていたように、対象も今年度は女性に絞っているのですが、年々さらに範囲を広げることも考えていますし、男性向けの意見交換のような会も設けてみたいと思っています。とりあえず今年度進めてみながら、実際にどのような課題があるのかを拾い上げながら進めていきたいのと、自治会単位ということで、先日もある区から申し出をいただき、出前講座に行ってきました。やはり地域の中でも「男性ばかりが出てきていて、女性にももっと参画してほしいんだけど、どうしたらいいんだろう。」というようなお話をされていました。すごく熱心に聞いていただいて、やはりそうした地域に実際に出向いてお話をしながら、今後どうしていこうかというようなことを考えていけたらと思っています。

あと、高校では探究活動みたいなところで、総合高校と豊高の定時制に伺いましたが、今は皆さん自分自身はジェンダーギャップを感じていないと言われるのですが、実際に家庭の中ではどうだろうかというような話をすると、「やはり役割分担ってお母さんに結構偏っている」「家事なんか特にそうだね」というような話も出てきました。また、受験や進路のことでもそうなのですが、やはりそこで男女の差というのが出てくるということもありましたので、対象ごとに内容を検討しながら進めていきたいと思っています。

E委員　私もジェンダーギャップについてです。うちの娘が今大学で受けている講座では、一言でいうと、やはり男性に育児をさせるのがピンポイントだとおっしゃっていたそうです。

それと、このジェンダーギャップの問題というのは、明治時代から戦後あたりまで家長制度という女性の権利がすごく制限されていた制度が法律としてありましたが、それが今にも影響を与えているのは間違いないと思うんですね。ですので、その影響を顕著に受けている 70 代や 80 代の方というのは、今の父親がオムツを替えるという姿をなかなか許容することができないというのは当然のことだと思うんですね。家長制度の世界の中で育った方たちや、その子の世代にもその影響はありますので、まず家制度や家長制度というものについてしっかりと調査をされるのが先決ではないかなと思います。家制度や家長制度というものが、実際に日本で法律としてあったんだということを若い世代にも教えていかないといけないと思います。

それから、アンケートですが、スマートフォンでアンケートを考えていらっしゃいますが、これだとスマートフォンを持っている世代しかアンケートを取れませんので、もう少し上の 70 代や 80 代の意見もしっかりと聞き取って、どこまで若い世代とお互い許容しあえるのかというところを探っていく、ここが一番難しいのですが、それをしないことには、こういう地方には割と身近におじいちゃんおばあちゃんがいる家庭が多いですので、そこからの圧力というのは免れないと思います。そのあたりにもう少し力を入れてほしいと思いました。

F委員　移住・定住について、少し質問とご意見させていただきたいのですが、先ほど移住者の小分類について少しお話が出ましたが、資料５の豊岡市への移住者数の推移のところで、2020 年は 123 人と大幅に増えている中で、豊岡市というくくり

ではなくて、出石や日高で何人、また、出石に移住した方はどのようなところに魅力を感じて来られたのか、こういったデータがあれば教えていただきたいです。私の意見としては、出石で働いている中で一つ思うことがあって、出石は伝統建築保存地区に指定されていて、古き良きものをこれからも守っていくという素晴らしいものですが、逆に私たちの世代はこれが壁となっていて、例えば店舗改装や時代の流れに合わせた新しい事業を展開したいと思う中で、このような看板を立てないでくださいとか、明治時代みたいな建物に直してくださいとか、万が一石が飛んできてガラスが割れたときに全部改装してもらわないといけませんというような、いろいろな規制をかけられてしまったりするんですね。移住してきた新しい方だった場合を考えたときに、やはりそこは少し柔軟に動いたほうがいいのではないかと感じています。出石で問い合わせたところ、ダメだ、これはしてはいけないの一点張りで、こうするのはどうですかというような提案が全く得られなかったので、豊岡市の大交流課に問い合わせさせていただくと、その際にも管轄は出石なのでこちらでは分かりかねますと言われてしまったので、先ほどフォローアップの話もありましたが、その地区に特化したフォローというのにも、もう少し力を入れていただければありがたいなと思っています。

事務局　旧町ごとの分類はしていますが、今日は持ってきていませんので、また改めて提出できるものはしたいと思います。

G委員　「深さをもった演劇のまちづくり」ですとか若い方が移住してきてコミュニティをつくっていかれる、本当に大きな成果を上げていると私は思っています。情報発信なども博報堂を連れてきたあたりからと思いますが、すごく変わってきていますし、ターゲットに刺さるような情報発信ができていて、そういう面ではすごく効果を上げていて、それが人口減少を抑える下支えになっているのではないかと思うのですが、それが一般の市民の方の理解がなかなか得られていないという認識もあります。ここをどのように埋めていくのか、それが一つひとつの政策をされている皆さんの仕事なのか誰の仕事なのか分かりませんが、演劇祭をすることでこういうメリットがあるというようなことを数字で説明していくことも可能ですけれども、もっと「あ、そうか」というようなものが必要なのかなと思います。

特にジェンダーギャップの解消を地域や家庭に下ろしていくとなったら、直接一人ひとりに、しわ寄せだと思って受け止めるような方々に届いていくわけですね。そこを反発を受けないような形で上手に広げながら、演劇のことも移住者の方も含めてみんなでこういうまちをつくっていくんだという、ここで話し合っているようなことが皆さんにうまく伝わっていくにはどうしたらいいのかなと常々思っているのですが、そのあたりはどうなんでしょうか。

座長　そのあたりも考えていかなければならないポイントだと思います。現状におきましても、一部ですけれども、そういった点に気を付けながら今後こういうものを見据えていくべきだという意見は内部からも出ていますので、またこのテーブルの中で情報として上げさせていただいて、それに対してご意見いただくという

ことをしたいと思っています。

H委員　まず地域おこし協力隊の受け入れ側の定義として、現状、公に絡んだ会社でないとエントリーできないと聞いているのですが、一般企業もぜひエントリーさせていただきたいなと常々思っています。

起業して６年になりますが、現場の声を教えて差し上げられるかなと思って何度か受け入れしたいと言ったことがあるのですが、ここはできないという一点張りでしたので、ここをもう少し明確にしていただけると嬉しいなと思っています。

日々、観光業をやっている上で思うことは、もちろん観光客を増やしたいということと、雇用を安定させたいということです。あと、もう一つは一緒にまちの観光業を運営していく人が欲しいということを常々思っているのですが、地域おこし協力隊の方々が観光業にも入っていただいていますが、何か自分で起業を考えるエーススストライカーばかりが入ってきているので、私たちのように雇用を安定させるという観念には合致しない人たちが入ってきているんですね。でもこのコロナ禍で、この夏の募集に関して思ったことは、40 代や 50 代の人生経験豊富な層で、定年退職後は田舎に住みたいから、まずは 50 代のうちにお宅でアルバイトをさせていただいて、ゆくゆくはそちらで暮らせたらいいなと思っていますという方が、15 名ほどの募集に３件 50 代の方がきて２名採用したのですが、そういう層をとりこむ仕組みが今の豊岡市にはないのかなと思っています。

あと、これは前回の会議でもお伝えしましたが、会社で従業員を雇おうと思ったら、住むところを用意しないといけないですね。お試し住宅というシステムがありますが、３か月とか期間限定で借りるというのが難しいので、地元の会社が共同で使えるような寮を用意してもらえないかなというのが強い思いとしてあります。今年の採用状況でいうと、ここ５年の中で一番優秀な層が割と豊岡に興味がある、住みたい、働いてみたいということで応募いただいているので、もっとそこをとりこんでいかないといけない、すごいチャンスがやってきているなという思いで運営しています。

座長　従業員のことについて、たくさんの応募があったということがありました。その点は、先ほど副座長が説明されていた景気状況に連動するということが、コロナではあるけれども関係しているんですかね。

副座長　多少はあるかもしれません。これは印象論になってしまうかもしれませんが、地域おこし協力隊などで活躍したいタイプと大都市・大企業型に就活していくタイプとでは、ちょっと違う人たちなんだろうなと思っていまして、そういう意味では関係性は弱いのかもしれないなと思っています。

それに関連したことで、前市長だったときに、今年こんなにたくさん地域おこし協力隊に応募があったと喜びのメッセージが投稿されていることがあって、ちょっとそのときに Facebook 上で意見交換をしていたのですが、20 人 30 人くらい採用予定のところ、その倍以上くらい来ていると。それはもったいないと言っていたんです。８月くらいにたしかジョブナビ豊岡か何かで但馬地域の企業が集まって合同説明会をやるという連絡を受けていましたが、こういった民間の企業が

集まって、但馬地域外から 50 人 60 人規模の若い人たちを実際に豊岡に移ってくるという意思で集めてくるというのは、相当大変だと思うんです。現に 30 人 40 人くらい採用されない人たちがそこにいるわけですね。これを逃す手はないでしょうと。やり方によっては総務省とかに怒られるかもしれませんが、厳密に地域おこし協力隊としてはこの予算でこの人数しかダメですと。ただ、落ちた同じ日に但馬地域の企業が寄ってたかって、こちらの企業受けてはどうですか、豊岡に来る方法は他にもあって、他にもいろいろたくさんおもしろいことをやれるんですよと囲ったらいいのではないかと思っているんですね。そのあたりの地域おこし協力隊の募集とか採用のあり方と、但馬地域全体の民間の採用の連携・共有というのも、もっとあっていいのではないかなと思っていました。

それから、重要なこととして、行政がやるのも一つなのですが、行政がやらなければいけない必然性はないわけですね。確かに起業していて自分一人ないし２、３人でやっているということになると、建物などが大変だと思うかもしれませんが、そこは例えば若い事業者の方々が集まって、10 人 20 人くらいのキャパシティならみんなでチップインして寮をつくろうよとか、あそこの空き家とか小学校の廃校になっているところをちょっとリノベーションして使えるようにやってみようよと言いながら、まず民のほうでやっていただきつつ、「足りないから 10%や 20%くらい補助ちょうだいよ」いうやり方も一案かなと思います。なかなか行政がやると、どの枠組みを使うんだとか予算が取れる取れないとか、最初の３年だけだとかいろいろと面倒くさいことを言われるので、民のほうでやってもいいかなと思ったりもします。

H委員　一つ言い損ねました。竹野の観光協会が今年から法人化されるということで、今手続き中なのですが、先ほどＦ委員の話にもありましたが、暗黙のルールが多過ぎて身動きが取れなくなっている案件があるようです。

今年、竹野浜でキッチンカーで販売をかけるという業者が他所から来ていて、結構みんな怖い感じで受け入れ態勢になっているのですが、キッチンカーが来たときにいくらもらうとかそういうルールも一切ないのに入ってこられると、みんな疑心暗鬼になってしまっているような状況もありますし、もっと人に来てほしいなら、外部から入ってくる仕組みを作らないと人が逃げてしまいますね。ですので、先ほどのガラスが割れたらという話もありましたが、もう少し住み心地の良いまちを目指していただければと思いました。

G委員　求人のことに関連して。これまで尖った人材とか面白い人材をターゲットにされてきたんだと思いますが、演劇とかジェンダーギャップとかいろいろなところで豊岡が取り上げられて、すごくイメージが上がっている今がチャンスだと思うんですね。「そこらへんにある田舎」ではない、「ここしかない珍しい田舎」というこのイメージが保たれている間に、人手不足の業界だとかのために、劇をしたい人とか何か一芸に秀でた人でなくても豊岡はウェルカムですよという、何かそういうようなこともしていただけたらなと。すごくもったいないと思います。

Ｉ委員　演劇ワークショップによる非認知能力の向上というのがありますが、非認知能

力というのはこういうことです。今までずっと学力の構成要素として、知識とか技能、そしてそれを使った思考力、判断力、表現力というのが大切だとずっと言われていました。でも、一昨年に学習指導要領が変わった時に、初めて文部科学省はもう一つ新しい学力を提示しました。それが「学びに向かう力、人間性等」というものです。

豊岡市は、こういう言葉ではないのですが、きっとそういうことが大切だろうなということで定義付けをし、「最後までやり抜く力、自分自身をコントロールする力、友達と協同しながら学び合って何かをしていく力」これらの力を非認知能力と言ってきました。

そのようなことが大切だということはずっと昔から先生たちは知っていたのですが、どうしたらいいのかが分からなかった。今回は豊岡市にある地域資源を活用して、演劇ワークショップでこの力を付けていこうと考えました。

この力というのは、欧米でもかなり前から研究をされていて、演劇とかダンスとか、あるいはマスメディアを使ったような情報のアウトプット、こういったことをしていくと育ちやすいということが分かったので、演劇ワークショップによる非認知能力の向上を目指しました。ただ、これはなかなか効果があったのかどうかが分かりにくいので、青山学院大学の刈宿先生の研究室にお願いして、数値に表せないものを無理やり数値で表してもらおうという取組みをしています。

少しずつその成果が見えてきて、さっき言った三つのうちの協同性と自制心については、ワークショップをしたあとでは効果が上がったということが分かってきました。それは子どもや先生へのアンケートや、実際にやっているところを観察していただいて分析をした結果です。

まだいろいろと細かいことは分かってはいないのですが、その中で分かっていることは、協同性と自制心については確実にプラスの変化があったということと、地域によって違うということです。すごく少人数で地域から見守られている子どもたちと、社会的な背景をたくさん持って、言ってみればガチャガチャしているような中で認知能力の育った子どもとでは、ワークショップをする前とした後では変化があって、見守られている子どもたちはあまり変化がないのに対し、学級が荒れているような状況のところほどすごく効果があったという、そんなことが見えてきました。８月５日には、教職員だけにですがそのフォーラムもします。

ゆくゆくは市民の皆様にもそのようなことを情報提供し、直接このことが移住に関係することにはならないと思いますが、豊岡では先を見てこのような教育をしているということで、一人でも二人でも豊岡に目を向けていただいたり、豊岡に定住していただいたりする人が生まれ、この教育を受けた子どもたちがやがて社会に出るときに、一旦は外に出るけれどもやっぱり豊岡に帰ってくるという、そのようなハッピーなストーリーを描きながらやっているところですので、今後ももう少し精度を上げながら、正しい理解を皆さんにしていただければなと考えています。

A委員　ジェンダーギャップについて、個人と地域の意識改革をしようという話ですが、

それだけでなく、ぜひ企業に対してもジェンダーギャップの理解の拡大をお願いしたいと思います。

また、教育の話にもなりますが、子どもたちに対しても、ジェンダーギャップの取組みについてお話しいただければと思います。

男女の育児休業もどんどん進んでいますが、それだけではなくてキャリアの継続のために、一旦育児休業で離れてしまうがゆえに自分のチームやプロジェクトを継続できないということで、子育てをあきらめたり、夫婦のどちらかに負担をかけたりということがあるので、それがなるべく改善されるようにフレックスな業務体系や在宅ワークの推進なども考えていただければと思います。

演劇のまちづくりについてですが、今後は市主導ではなくなるということは聞いています。以前から国からの交付金ですとか文化庁の支援を受けていると思いますので、実行委員会だけではなかなか継続していくことは難しいと思います。今後もぜひ資金面で訴えかけなどしていただけるのか、難しいのであれば、今は地域おこし協力隊が非常に多く演劇祭に関わっているのですが、３年間が終了したあと、自分たちが本当にここで続けていけるのか、演劇祭がないことによって、自分たちが生きていくのは難しいのではないか、ここまでやってきたが豊岡に居続けることが難しいかもしれないと不安に思っている方もいます。

この演劇祭がただの外貨流入のイベントという形にならないように、豊岡市の魅力的な教育や自然をＰＲするチャンスとして、豊岡ファンを創設する機会として続けていただきたいと思っています。これによって観光客に対して豊岡との交流を図っていただきたいという思いです。

最後に、私は地元住民ではなく、移住してこちらで起業をさせていただいていますが、元々豊岡がもつ歴史や文化が好きで来ました。いろいろと移住政策をされていますが、私はそれは一切使っていません。ただ単純に好きで来ました。自然や街並みといったものをどんどん掘り起こして、地元の人がワクワクするような、まちの底力を上げるような考えを皆さんに深めていただければなと思います。

座長　　大変長い時間ありがとうございました。

５　その他

第２期豊岡市地方創生総合戦略の改訂について

事務局から改訂の内容について説明。

６　閉会

座長　　今日頂きました意見等は、今後の戦略の内容に込めるという意味合いがありますので、重要な意見として受け止めさせていただきたいと思います。また、いろいろな面でまた皆さんに問いかけたり意見を求めたりするかもしれませんが、その時はよろしくお願いしたいと思います。